

特定非営利法人 子ども自立の郷
ウォームアップスクールここから

プロジェクト 報告書

真夏の夜の光まつり 2014

龍谷大学	2 回生	坂本芽優
京都教育大学	2 回生	櫻木晴日
龍谷大学	2 回生	田中梢
龍谷大学	3 回生	寺嶋利奈
京都文教大学	2 回生	中村航貴
花園大学	3 回生	松尾銀河
京都大学	3 回生	山下瑳弥子

2014/11/20

【プロジェクト日程】

	竹	食	紙	歌	その他
8/16	竹切り	予算決定	脚本・チラシ確認する	音取り	当日までのスケジュール 決め 雨天時どのように対応する か話し合う
8/17	節取り、やすり 組み立てて流してみる 脚組の検討	看板作り	先生にチラシのチェック 影絵のキャスト決め ランタン試し作り 用紙などの買い出し	校歌練習	雨天時、晴天時の設案 のまとめ
8/18	カビが生えているか確認	買い出しリストの作成 当日作る人の決定	チラシ印刷 全員で影絵の添削 →脚本、構図完成	校歌練習	校舎の掃除 当日の設計図(雨天時・晴天時)
8/21	脚のための竹を取りに行く→脚作り 流しそうめんデスト	お祭りで出す食べ物の 試食会の提案	影絵作り、舞台の確保 →外で実際にタープを使って確認 ランタンの間隔の確認 招待状作り 読み合わせ		5日分の献立決め 設営チェック
8/22	流しそうめん調整 かぐや姫のすだれ作り →ささくれの処理など		スクリーン購入 読み合わせ ランタン作り	校歌練習	コメリに買い出し 申先生の視察 草刈り(男子)
8/23	流しそうめん調整 かぐや姫のすだれ作り		影絵 試し写し 番号札作り(受付)	校歌練習	カフェの準備

【プロジェクト日程】

	→竹を麻ひもで編む		ランタン作り		
8/24	流しそうめんの調整 かぐや姫のすだれ作り 影絵の支柱カット	下準備リハーサル	影絵のスクリーンの完成 キャンドル入荷		コメリに買い出し テントの中の配置図、晴 れの日の設営案の作成
8/25	角度計測、脚組み作成、 高さ長さの確認作業 竹切り	当日のリハーサル	影絵の人形の3分の1完 成させる		余呉支所へ放送のお願い をしに行く 校舎の掃除
8/28	竹の加工 かぐや姫すだれ編む	買い出し 場所の本決め	残りの背景や人形をの完 成		ドラム取りに行く 設案図の確認 発電機の修理、試運転
8/29	かぐや姫の修正 流しそうめん、脚作り	綿菓子など機材を借り に行く→リハーサル	影絵を通してやってみる		片付け 椅子、机を取りに行く ターフを組み立てる
8/30	本番用の竹割り 最終リハーサル	下ごしらえ	舞台、音響の設置 プロジェクターを借りに 行く 影絵のリハーサル	リハーサル	テント取りに行く ごみ箱の作成 テント設営
8/31	最終調整、設置	仕上げ	ランタンの設置		タイムテーブル確認
9/1	片付け	片付け	片付け		
9/6	木工室掃除				理科準備室掃除

会場設営

■8/16~8/20

唐子先生から「設営図がないと何がどれくらいいるのかわからない、去年は祭り開始 30 分で雨が降ったことを鑑みて晴天時・雨天時・晴れ⇒雨の 3 パターンの設営図が必要」とのことで 8/18 に提出を求められる。8/18 に第一草稿提出。高齢者の身体能力の関係や電源の関係から再提出を要求される。8/19・8/20 に休日会議。大枠を決定する。

■8/21~8/27

8/21 昼、唐子先生に第二草稿提出。雨天時の設営案について使用不可の教室を確認。再考する。投光器やテント・放送機器を借りる約束を取り付けに 様、 様などのお宅へ伺う。この時日時指定を忘れる。休日に入る前の 8/25、校舎内・外の探索を行う。外にあるコンセントの位置を確認。ドラムを実際に伸ばして設営のイメージをつかむ。物品の個数も確認。休み期間中に設営案最終稿となるであろう詳細図作成。晴天時は B6 4 枚分。雨天時は教室毎に 2 枚分ずつ。晴れ⇒雨となったパターンの物品移動リストも作成。

■8/28~8/30

8/28 朝、唐子先生に提出。ゴーサインが出たため各先生分+インターン生分=10 部設営図等を作成。和田先生、インターン生と情報共有。8/29・30 にレンタル物品を借りに行くとともに雨天時に会場として使う昇降口の掃除、物品移動。8/30 に大テントのみ実際の位置に設営。

■8/31(祭り当日)

天候は曇り。とりあえず雨天時用の設営を行う。昼過ぎに雨に濡れても大丈夫なもの(椅子・机・タープ類)を設営。先生、生徒、地域の方、屋台班のインターン生以外のインターン生で行う。降水確率が下がったために雨に弱いもの(ドラム、影絵舞台、屋台で使う機材、投光器、材質が段ボールの物など)を設営。

■9/1~

校舎後片付け、物品の返却。お借りしたものは今後の信頼度に関わるため念入りに掃除して返却する。来年度に向けたマニュアルを作成するために校舎内外の探索。休み期間にマニュアル作成。

【学び・反省】

- ・来場者、とりわけ高齢者の目線に立つことの難しさを感じた。当人に相談するのが有効策か。
- ・物事を出来るだけ具体的に考える力がついた。また、机の前で悩むよりは実地調査の方が有効であることを経験した。1 人だけ感覚を掴んだだけではしょうがないので、それが伝えられるようにメモに残すことも重要。

チラシ

地域の方々に今年もお祭りが開催されることをお知らせするために制作。実習以前の川狩りの際に自治会長さんに原案をお渡しし、配布日等の確認も行った。初期の段階では生徒全員にイラストを描いてもらうことで、協力して作り上げたものにしようと考えていたのだが、実習前までの打ち合わせ不足の影響でなかなか思うように作業が進まず、最終的には青い色画用紙にワードで打った文字とインターンシップ生全員で書いた手書きのイラストを張り付ける形となった。その後配布となったのだが、自治会長さんと約束していた日に法事のため会うことができなかったのも、手紙を書き直接のやり取りはせず頼んだ形となった。川狩りの際に確認済みの事案でもあったため、そのことについて問題意識はなかったのだが、次の実習日にチラシが当初の予定日に配布されていないことを知る。原因として考えられるのは、お手紙の際にお願いしたい旨のみを書き、配布日についてなどの詳細を記入しなかったことがあげられる。また、インターンシップ生内でも手紙の内容についての確認を怠り、一人に任せてしまったのもあった。その後予定から 5 日遅れで配布。また、遅れを取り戻すため、毎週土曜日に行われているカフェでも配布を行った。

竹班 (メンバー：松尾，中村，寺嶋，田中)

他の班と同様に、竹班も実習が始まる前にミーティングを開き事前計画を立てた。竹班が担当した企画は「流しそうめん」「かぐや姫撮影会」の2企画。以下では、まずそれぞれの企画の事前計画、創作・加工作業、反省を、最後に祭り当日の様子と成果を述べようと思う。

「流しそうめん」

事前計画：実習前ミーティングでは、まず流しそうめんの材質、構造、サイズ等の検討を行った。これらについては、コンソーシアムでの講義の際にもここから以外のインターン生に意見を尋ねる機会がありそれらも参考にした。

実習前のミーティングは数回行った。材質は竹をメインに考え、構造やサイズに関して事前に各自が調べた情報を持ち寄り、具体的な案を決定していった。実習初日が竹材の調達日になっていたのも、最低ラインとして竹の必要本数は割り出す必要があった。ただ、ここからのグランドのサイズや形、校舎の構造など把握しきれていない情報が多く、また実際に設置してみないことにはイメージがわからないこともあり、竹の必要本数は出したものの、事前計画自体はあくまで仮案の状態で実習を迎えた。

作業：ここからでの実習初日。地域の方々に手伝っていただきながら竹の伐採を行い、事前に考えていた必要本数を確保した。作業としては鉋で竹を半分に割り、金槌やノミを用いて節を取り除いていく。はじめは節取りの仕上げとしてグラインダー等を使用していたが、後になってノミで削るだけで十分だということが分かり、ノミ仕上げに移行していった。最後に、竹の淵のささくれをサンドペーパーや鉋で落として完成となる。作業には子ども達も関わってくれ、はじめの頃は道具の使い方などは子ども達に教わりながら進めていた。

上記の作業で流しそうめんのレールが完成する。次にそのレールを支える足組みを作る作業に移る。足組みは当初の予定では、細い竹3本を麻ひもで縛ったものにするはずだったが、試行錯誤を重ね、また地域の方からのアドバイスもあり最終的には木製の一脚(U字型足組み)のものと竹製の三脚のものに落ち着いた(図1参照)。木製のU字型足組みは地域の方に作り方を教わった。木板をジグソーという電動工具を使って丸く切り抜いてから半分にカットしてU字を作り、木棒に固定して完成する。足場は地面に埋めるか、ブロックに差し込んでいた。

反省：一番大きな反省は事前計画、情報収集の甘さであった。流しそうめんの構造やサイズ云々の前に竹そのものの性質を把握しきれていなかった。情報不足のために早々割った竹はほぼ全てにカビが生えてしまい、そのため当初確保していた竹では本数が足りなくなり、結果としてさらに2度も地域の方に竹の伐採をお願いすることとなってしまった。加えてもう一つ。竹のカビや縮みといった予期せぬアクシデントに見舞われたために、また予想以上に加工作業に手間がかかったために、予定していた作業日数を大幅に超えての完成となり、もう一つの企画である「かぐや姫撮影会」用の竹細工への取り組みが遅れてしまった。

「かぐや姫撮影会」

事前計画：そもそもかぐや姫撮影会とは、竹で作成した巨大な筒をかぐや姫の竹に見立て、その中にかぐや姫として人に入ってもらい記念撮影するという企画である。本番では被写体の方に浴衣を着ていただき扇子を持ってもらった（図 2.を参照）。

こちらの実習前のミーティングで案を練った。ただ、こちらの場合は流しそうめんとは異なり前例のないもののため、一から案を考えだす必要があった。たまたま「京の七夕」というイベントが実習前にあったので、メンバーの交流も兼ねつつかぐや姫撮影会の参考のために参加した。そして話し合いの結果、竹を細く割った板を井戸蓋の要領で編み、丸めて筒型にする案でまとまった。だが、これも実際に出来上がらないことにはイメージがはっきりしないので、仮案として詳細は作成しながら様子を見て決定していくこととなった。

作業：作業は竹を鉋で細い板に割ることから始まった。イメージしていたサイズを実現するには計算上 100 本以上の竹板が必要であった。ひたすら竹を鉋で割り続けた後、それらの板を井戸蓋の様に麻ひもを使って編んでいくのが次の作業となる。これは YouTube の動画で編み方を調べ、それに沿って行った。一箇所では弱いので、全体で計 6 箇所を編み込んだ。仮案の段階では見当がつかなかったが、編んだ竹板はそれだけでは自重に耐えられず自立しないため、土台として足場作りが必要となった。熟考の末、木の板に垂直に柱を打ち込み、竹板を直接その柱にビスで固定することで編んだ竹板を自立させることが出来た。本番の撮影会ではお祭りが夜で暗いため照明を用意し、カメラはインターン生が持参して撮影が行われた。この写真は、後日、プレゼントという形でインターン生からのメッセージと写真立てとともに各お客様に郵送した。

反省：流しそうめんの作業が予想以上に長引いたため、こちらに割く時間が削られてしまい完成がお祭りの前日という結果になってしまった。そのために、リハーサルが出来ず、お祭りが始まるまでの時間を使って、撮影会の実施場所やカメラのアングル、照明の強弱の調整を行った。また、かぐや姫は流しそうめんに比べて子ども達に関わってもらうタイミングが少なくなってしまうように感じている。カメラが得意な子どももいたので上手く絡められれば良かったが出来なかった。

「祭り当日・成果」

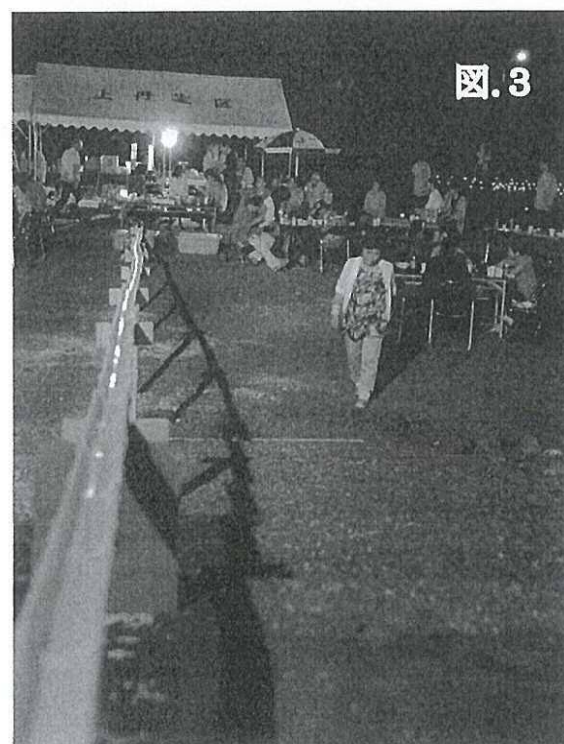
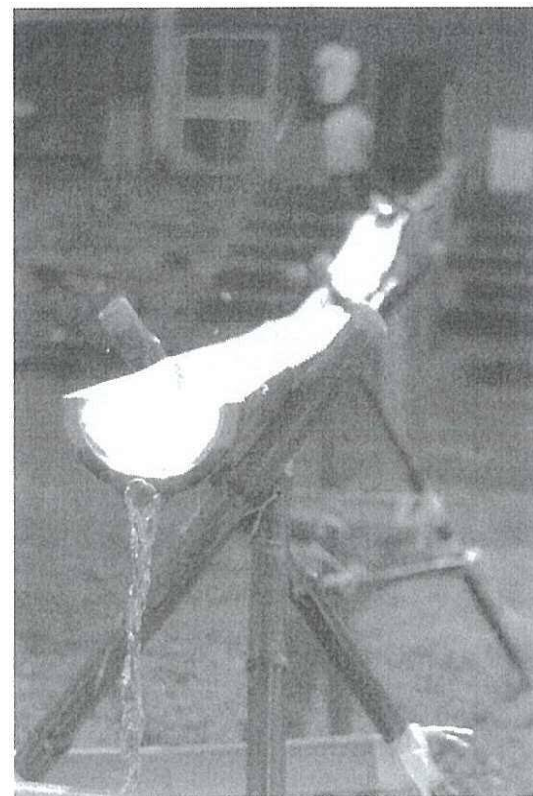
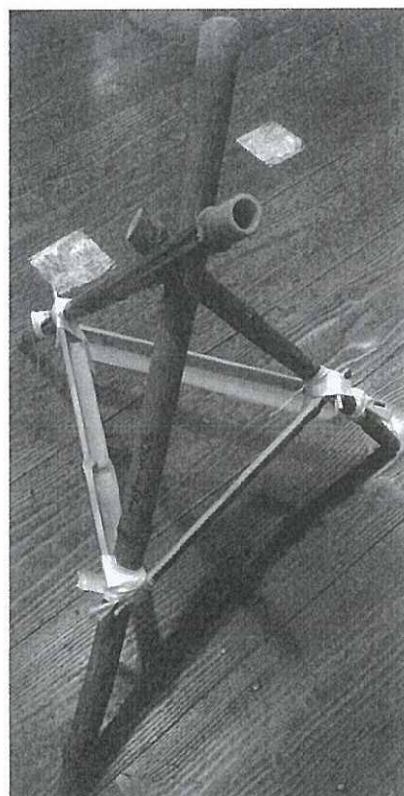
祭り当日は流しそうめん、かぐや姫撮影会ともにたくさんの方に参加していただくことが出来た。流しそうめんではレールの両サイドが人でいっぱい状態となり、予想以上の盛況であった。祭りの開催が夜ということもあり流しそうめん自体の転倒という懸念もあったが、野外用の照明のお陰で視界が悪いということもなく特に大きな問題は起こらなかった（図 3.参照）。

かぐや姫撮影会では、はじめは照れもありなかなか人が集まらなかったが、各テーブルへの声掛けなどにより徐々に人が集まっていった。また撮影に来られるのは女性の方が多く、撮影している人を見て若干の照れが混じりながらも集団で参加してくれる方々も多くいらっしやった。一組だけだが父子でのツーショットもあった。

祭りの目的が「地域への感謝と交流」であり、流しそうめんもかぐや姫撮影会もそれら

の目的達成には少なからず貢献できたと考えている。お祭りという場を盛り上げる役目として、あるいはインターン生と地域の方々、ここからと地域の方々、子ども達と地域の方々が話し笑い合う場作りが出来たのではないだろうか。竹班は唯一力作業でありながら、女の子のインターン生も含めて作業していた。最後までてんでこ舞いの状態で本番を迎えたが、その努力分の役目は果たせたのではないだろうか。

(以下、添付資料)



放送の手順

1. 電話をかける
 2. 音声応答装置の指示に従い、暗証番号を入力した後、#を押す
 3. メインメニューが開始されるので、放送を行う場合は6を押す。確認・消去は8を、終了する場合は9を押す
 4. すぐに放送する場合は6を、放送日時を指定する場合は7を押す
 5. 放送日と時刻を8桁で入力する 〇〇月〇〇日〇〇時〇〇分：〇〇〇〇〇〇〇〇
 6. 確認音声流れるので、正しければ#を押し、間違っていれば*を押す
 7. 続いて録音が始まるので、終了時には9を押す
 8. 録音内容を登録する際は#を押す。録音内容を再生する場合は3を、再録音は6を、登録中止の場合は4を押す
 9. 登録すると、確認音声流れるので再度、正しければ#を押し、放送日の再登録をする場合は7を、登録中止の場合は4を押す
10. 登録完了

ランタン（紙班）

当初の予定では竹班で竹ランタンを100個、紙班で竹よりも手軽な素材で100個作成することを考えていたのだが、竹班のランタンは他の竹班の作業が想像以上に大変であったため断念。最終的には150個程度のペットボトルランタンを紙班の管轄として子ども達と一緒に作成した。

最初に与えられたテーマとして、真夏の夜の光祭り、というものがあつたのでまず意見交換会にて真夏の夜に光るものの案をいただいた。中でも紙コップに水を入れてろうそくを浮かべるのが安価でいいのではないかという話になり、検討。この案の場合水で重みがあり、いざ倒れても中に入っている水で消火できるため安心というところが利点であった。その後ランタンは紙コップより透明のコップにここからで作っているトンボ玉を入れて上にろうそくを立てるのが綺麗だし、地域の方や子供たちとも一緒に作れるのではないかという話になった。しかしコップよりペットボトルの方が安価で安全であるため、そちらに方向転換。ペットボトルランタンを秋田のワークショップで実際に幼年寄り等と実施していたため採用した。決定後はインターンシップ生にも、特定非営利法人子供自立の郷ウォームアップスクールここからでもペットボトルを集めてもらう形で協力していただいた。また、トンボ玉はコストがかかりすぎるため断念することになった。

実習中の流れに関しては唐子先生からのご指摘を受け、より楽に早くできるように形状変更を行った。ろうそくの買い出しから実際に試作品を作り夜に点火してテストも行った。当初は下に入れる土が不恰好だから半分より下にマスキングテープを貼るつもりだったが、暗くて土があまり見えず気にならなかったことと、上に貼ったほうが光った時にきれいだということが判明したため変更。ここで完成形が見えた。

その後先に始まっていた屋台の看板作りを、イラストが苦手だからという理由で嫌がっていた子供たちと一緒に作業できるものとしてランタンづくりを開始。予想以上にはまってくれた子がいたことにより作業のペースはとても速く、4日間ほどで150個程度が完成。そのほとんどを一人の子が作ってくれた。ほかの作業にはあまり進んで関わろうとはしなかった子達とも最も一緒に作業できた企画として、大成功だったのではないかなと思う。

お祭り当日も天気にも恵まれ、無事設置し皆さんに見ていただくことができた。初めに決めた設置場所は受付から会場までの誘導灯であったのだが、個数の多さからオブジェも作ることができた。よごという文字をハートの中に描いたり、椅子を組み合わせて即席で作った台に飾り付けたり、各テーブルの上に置いて飾ることができたので、より身近に子ども達の作品を感じてもらえたかなと思う。すべての企画の中で最も順調に、かつ子ども達を巻き込んで行えた。それには事前の打ち合わせが密であったことと、企画の意図がぶれずに最後までやり通せたことがあるように思う。

影絵（紙班）

初めに：余呉はかの有名な「天女の羽衣伝説」発祥の地である。我々はその点に着目し、地域になじみのあるこの伝説を「影絵」という幻想的な手法で楽しんでいただきたく、脚本から自分たちで起こし、子どもたちを巻き込んで祭り当日に上映することとした。

当日までの流れ：まず、脚本を作った。どんな天女の羽衣伝説が主流でなじみのあるものなのか資料を集め、それらを組み合わせながら脚本づくりを行った。その後、舞台設計をどのようにするか、配役や人形を動かす方法はどうかなど話し合い、実際の制作に取り掛かった。安全に配慮してグラウンドでもできるようにするというので、舞台を作ることとした。そのためにライトの角度や種類、どのようにすれば遠くの方も楽しんでいただけるかを実際にグラウンドで試しながら舞台を作った。また何度も会議を重ね、スクリーンと背景、人形の設置の仕方も試行錯誤しながら決定し、人形の作成に取り掛かった。子どもたちにどの場面で手伝ってもらうかは何回も話し合いになった。話すことが苦手な子どもならば、当日声優をすることは負担になる、しかし少ない練習時間で人形や背景を動かせるようになるためには睡眠時間を削ってもらわねばならない、ということで最終的に子どもたちの希望を聞き、声優をしてもらうことにした。配役が決まってからは、リハーサルまで練習を重ねた。

当日：当日は生徒の挨拶から影絵を始めた。生徒がマイクを持った途端会場からは「よっ〇〇！」という歓声が聞こえた。生徒は練習の時以上に素晴らしい声の演技を披露し、感動的なフィナーレを迎えることができた。会場の反応は、舞台の中からだとはわからなかったがあとから写真を見て、じっと見て楽しんでくださっている様子を伺うことができた。

反省：当日、声優の紹介を上映後にできなかったことが反省である。一人一人に焦点を当て、会場の拍手を浴びることも大きな経験になると思うので、悔やまれる。しかし、子どもを巻き込みながら、地域の方に喜んでいただけたので、成功したといえるのではないかな。

校歌（歌班）

初めに：私たちはお祭りを開催するにあたり、地域の方々に喜んでいただけるよう、現在「ここから」で利用させていただいている廃校になった校舎の校歌を歌うこととした。この校歌を再現することで、地域の方々が小学生の頃を思い出し、懐かしんでいただけるのではないかなという期待を込めて企画したものである。

本番まで：まず、歌詞は「歌詞版」として残っていたがメロディーがわからなかったのが、地域の方に校歌が録音されたカセットをいただき、それをもとにメロディーを書き起こし、それに合う伴奏をつくった。これを2、3日に1回の割合でインターン生全員で練習をした。本番は、外で行うということで伴奏を録音し、それを流すこととした。その録音する伴奏は生徒さんに弾いてもらい、祭りを一緒に作っているという実感を持ってもらえるようにした。

当日：当日はばたばたしている中で合唱が始まった。予定終了時間を大きく超えてしまっており、最後のサプライズ企画として位置付けていたこの校歌合唱も参加していただけずに帰ってしまった方も多くいた。当日は来場者に効果の歌詞カードを配布した。地域の方々の反響は大きく、「これは歌詞が違う」というご指摘を受けながらも楽しそうに歌ってくださった。祭りの後の宴会のようなものでも、もう一回歌ってえや、という声を聞き、もう一度合唱したほどだった。流れがうまくいかなかった部分もあるが、地域の方も喜んでくださり、大成功のサプライズになったと思う。

反省：反省として、楽譜起こしの期限を設定し、また毎日練習するという目標を掲げていたにも関わらず達成することができなかったことがあげられる。そのために練習の日程は大きくずれ、計画倒れになってしまってもおかしくない状態になってしまっていた。周りの人のおかげで無事合唱できたことを肝に銘じておきたい。2点目は、本番で伴奏を弾いてくれた生徒さんを紹介することができなかったことである。紹介する余裕が自分になかったことが悔やまれる。しかし全体として地域の方々が喜んでくださるお祭りができたので企画としては成功といえるのではないかな。

反省と学び（総合）

■目的は意識しないとずれていく

プロジェクトの目標は子どもたち、そして地域の方々と関わることを目的で設定された。しかしいざ実習が始まると各企画や運営に関して想定外の事態が続き、祭り当日までに準備が終わるのか、という焦りが生じた。また、なれない寄宿生活の中でそれらに対応する中で疲労が蓄積した。その結果、余裕をなくし、目の前の作業に没頭してしまい、子どもたちへの声かけが不足してしまったり、地域の方々との関わりが最低限のものになってしまったりした。目標が交流から目の前のタスク処理へと移行してしまった。

■情報共有・確認作業・相談・打ち合わせの大切さと難しさ

9/6 のインターン生間反省会で度々これらの大切さと困難さが挙げられた。また 9 月中の実習期間、実習後から 11/15 の成果報告会までの期間もこれらに伴う困難があった。

情報共有ができていないために特定個人にタスクが偏る、当日の人の動きが不明確になり祭りの進行がうまくいかないことなどがあった。

仕事一般に対する姿勢について、「言われたことしかできない。」という批判はしばしば耳にする。だが、受身の姿勢にならざるをえない背景には情報不足がある。

たった 2, 3 人だけが全体像を独占している状況では「言われてからやる」という受身の姿勢ではなく、「自らの頭で考えて進んで何か自分のやれることを探す」という姿勢にはなれない。このことに気がついてからは仕事に対して主体で動いていないときは「何かやれることはないか」と聞くのではなく「今どうなっているのか」と情報提供を求めたり、自分が主体で仕事をしているときは「伝えたつもり」「相手も理解しているはずだ」と独りよがりになるのではなく確認作業を行ったりすることを心がけた。

また、会議については「互いに時間の制約がある中でわざわざ時間を割いて集まる」という自覚が足りなかった。この項目については個々人でさらなる研鑽が必要だと思われる。

■インターン生としての自覚

インターン生としての心構えをして、実習に臨んだものの、実際のところ生徒である子どもたちと似たような扱いになってしまい、インターンをしに来させて頂いているのにもかかわらず、先生方に甘やかされている部分や、こちらもその扱いに慣れてしまい、甘えている部分が多々あった。自分たちの仕事に対する認識の甘さを感じた。

成果（総合）

■子どもの変化に立ち会えた

焦りや疲労から子ども・地域との関わりに気が回らなくなることの反省から、コミュニケーションにより意識的になった。たまたますれ違った時でも声をかける、閉っている扉を開けて中に入るというのはハードルが高いことだったので途中からは扉を開放し、子どもたちの方からも私たちが準備作業しているところに入りやすいようにするなど小さなことから心がけた。

今日やっと少し仲良くなれたかと思うと、次の日にはまた距離を感じたり、逆に昨日まで少しの会話しかなかったのに、今日は一緒に遊んだり、子どもたちとの関係は、日々良くも悪くも、小さくも大きくも変化していた。

私たちの交流を通じて変化したのは、私たちと子どもたちとの関係ではなかった。

最初は私たちの準備作業を、少し距離を置いて伺っていた子どもたちが、祭りの日が近づくにつれ、こちらから誘わなくても、子どもたちから積極的に協力・アドバイスをしてくれた。そして、祭り当日には、祭りに来て下さった方たちを、精一杯もてなそうと、一生懸命になっている子どもたちの表情を間近で見ることができた。

子どもたちを支えていく中では、自分たちの一つ一つの言動が子どもたちにより影響を、場合によってはよくない影響も及ぼす。だからこそ、自分たちの一つ一つの言動を大切に、その一方で、子どもたちの一挙手一投足を見て、感じて、考えることも大事だと感じた。

■失敗を活かす

祭り準備において、実際にやってみないとわからないことが多く、失敗が常に付きまとった。トライアンドエラーの繰り返しで失敗を次に活かす、分析・情報収集、相談を行うことで失敗を失敗のままで終わらせないという意識が根付いた。

■人と人との出会いの大切さを学べた

「ここから」という場所で、年齢もこれまでのバックグラウンドも違う様々な人たちに会った。

理事長の唐子先生をはじめとする指導員の先生方、コーディネーターである申先生、生徒である子どもたち、地域の方々、そのほか「ここから」関係する人たち、そして最後に学生である私たち7人。

これらのたくさんの出会いによって、互いが互いに影響をうけ、そして、それぞれの成長へとつながった。

今回のインターンシップはここで終了するが、ここで得た出会いを大切に、そして、これからも、一つ一つの出会いを大切に、また「ここから」それぞれがそれぞれの道へとスタートを切っていきたい。